

特集

痛みと作業療法

特集にあたって

米国連邦会議では2001年（平成13年）から2010年（平成22年）までを「痛みの10年」と定め、体温、脈拍、呼吸、血圧に次いで、「痛み」を第5のバイタルサインとしてとらえ、診療に痛みの評価を義務づけてきた。

日常生活を支援する作業療法の臨床場面でも「痛み」は、活動の拡大における重大な阻害因子となる。しかしながら、臨床において多くの痛みを有する対象者に関わる機会が多いにも関わらず、養成教育においては、「痛み」自体は独立した単位にはなっておらず、個々の知識はあっても、体系的に学ぶ機会が少ないのが実状である。

本特集は、このような課題への啓発を目的に、痛みの基礎から包括的アプローチ、作業療法評価と実践、認知行動療法の実際というように、臨床に直結する内容で企画したものである。最近の痛みに対する動向は、従来の局所的な対処の根拠への疑問から、多職種協業での包括的な対応へのパラダイムシフトに至っている。また近年、痛みを有しながらも痛みと向き合い、対処していく認知行動療法が注目されるようになってきている。精神科が対象領域でもあるOTにとっては目新しいものではないかもしれないが、痛みに対する応用についてはご存じない方もおられるのではないだろうか。

この特集が、痛みを有しながら生活する対象者への支援の充実を図る一助になれば幸いである。
（高島千敬）

痛みのメカニズム：痛覚と痛み認知

痛みに対する包括的アプローチ

痛みに対する作業療法の評価と実践

脳卒中後遺症者の肩の痛みに対する作業療法

慢性の痛みにおける心理的評価と認知行動療法

企画
担当

高島千敬（大阪大学医学部附属病院，作業療法士）

中村春基（兵庫県立リハビリテーション中央病院，作業療法士）

山本伸一（山梨リハビリテーション病院，作業療法士）